Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2015, Vol.24, 227-237

論 文

中高生版仲間集団排他性尺度の開発

有　倉　巳　幸［鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター］

Development of peer group exclusivity scale in junior and senior high school students

YUKURA Miyuki

キーワード：排他性規範、排他性欲求、仲間集団、尺度開発

【問題・目的】

本研究では、中学生・高校生用に仲間集団の排他性を測定する尺度を開発し、その妥当性・信頼性を検討するとともに、中学生・高校生の仲間集団の排他性に起因する諸要因の検討を行うことを目的とする。

有倉・乾（2007）や有倉（2011）は、小学生や中学生、高校生を対象に実際の友人関係・仲間集団について調査し、排他性を「排他性欲求」と「排他性規範」に分けて、学級適応感や所属する集団の適応感（自集団適応感）に及ぼす影響を検討した。前者の排他性欲求は、自分の所属している仲間集団およびそのメンバーに対する概念であり、仲間集団やそのメンバーとの親密さを確認するために、第三者を排除して仲間集団内だけの活動および、特定のメンバーと一緒にいることを求める傾向と定義した。また、排他性規範は、自分の所属している仲間集団の行動についての規範を表す概念である。つまり、自分が所属している仲間集団のメンバーがとるべき同一行動についての暗黙の規範のことであり、同一行動とは、同調行動や第三者を排除する行動から構成されるものと定義した。

これらの定義を踏まえ、有倉・乾（2007）は、小学校５年生から中学校２年生を、有倉（2011）は、中学１年生から高校３年生をそれぞれ対象に、排他性欲求は三島（2004）の排他性尺度を用いて、また、排他性規範は、９項目からなる尺度を作成し、学級適応感や自集団適応感に及ぼす影響を検討した。

しかし、三島（2004）の尺度および、この尺度を改良した仲間集団指向性尺度（三島、2008）は、いずれも、小学校高学年を対象に作成されたものであり、仲間集団の排他性の特徴や様相が異なるかもしれない中学生以降を対象に作成されたものではない。中学校や高等学校は、小学校と比べ、広範囲の学区から生徒が集まることや、放課後のクラブ活動に参加することなどが影響して仲間集団が構成されるという側面をもっている。また、それ以上に発達的な側面を考えると、抽象的な思考が可能になることに伴い自分の思考過程を自覚し制御するようになり、将来的な展望をもって行動するようになる。そのことが、中学生以降に特有の悩みを生み出す。

小学生と中学生以降のこうした違いを考慮すると、小学校高学年を対象に作成された三島（2004）の排他性尺度を中学生以降の生徒に援用するのは、中学生以降の友人関係・仲間集団の排他性について検討するには十分とは言えない。

そこで、本研究では、上記の定義を踏まえて、中高生用に排他性欲求尺度および排他性規範尺度を作成する。両尺度の妥当性や信頼性を検討するとともに、以下に示す諸概念との関係も併せて検討する。

まずは、社会的動機づけとの関連性である。友人関係・仲間集団が親密化する過程において、共通の活動や、価値を共有していることの確認、同じ境遇や価値観をもつ仲間だけとの行動（e.g., 榎本，1999）が見られる。つまり、親密化の過程においては、自分と相手が同じであることを求め、そうした相手との関わりを多くもつことで安心感を得たいと動機づけられていることが窺える。翻ってこのことは、これまでの研究でも明らかなように、異なる仲間を受け入れない排他性をもつことでもある。

ところで、人の行動を動機づける側面には、古くから二つあることが指摘されている。一つは接近（approach）であり、もう一つは回避（avoidance）

である。接近動機は、ポジティブな刺激（対象・出来事・可能性）によって行動を活発化させ、あるいは、これらに向けて行動を方向づけるものであり、一方、回避動機は、ネガティブな刺激（対象・出来事・可能性）によって行動を活発化させ、あるいは、これらから離れるよう行動を方向づけるものである（c.f., Elliot, 2006）。

これらの動機については、学習領域と社会領域とをあげることができ、Gable（2006）は、接近－回避の社会動機づけ階層モデルを提唱している。このモデルは、Elliot & Church（1997）の達成動機づけの階層モデルを社会領域に応用したものである。Gable によると、接近と回避の社会的動機、つまり、親和期待と拒絶不安は、それぞれ肯定的な関係性目標や否定的な関係性目標へ影響し、それぞれ好意と嫌悪の関係に向かう行動を活性化する。また、この知見を踏まえて、Elliot, Gable, & Mapes（2006）は、接近的動機づけと回避的動機づけという二つの社会的動機づけを測定する尺度を開発した。

相馬・山下（2011）は、Elliot ら（2006）の社会的動機づけ尺度を用い、接近的動機づけと回避的動機づけがそれぞれを反映した相互作用の展開を通じて、関係満足を高めることを明らかにした。また、山下・相馬（2011）は、社会的相互作用における社会的動機づけが個人のネットワークに及ぼす影響について２回にわたって調査を実施し、男性では、ネットワークサイズの変化量が大きいほど、また、１回目調査の回避的動機づけが高いほど、友人との共通ネットワークが拡大すること、また、友人との一体感が高いほど共通ネットワークが縮小することを示した。一方、女性では、ネットワークサイズの変化量が大きくなるほど友人との共通ネットワークが拡大し、１回目調査の回避的動機づけが高くなるほど共通ネットワークが縮小する傾向にあった。

さらに、相馬・磯部（2011）は、同質性・異質性といったネットワーク構成の違いがネットワーク評価に及ぼすプロセスについて検討を行った。ネットワークの同質性・異質性を一次元としてとらえた上で、これらのプロセスがネットワーク保持者のもつ社会的動機によって異なると予想した。その結果、ネットワークが拡大する時期において、接近的動機づけの高い者は、異質性の向上したネットワークを高く評価する一方で、回避的動機づけの高い者は異質性の向上によって摩耗を感じ逆に同質性の向上によって気楽さを感じることが示されていた。

これらの知見を踏まえるならば、仲間集団の排他性がどのような性質を帯びているのかを社会的動機づけによってとらえることができると考えられる。つまり、同質性を受け入れ異質性を排除する仲間集団の排他性は、接近的動機づけと回避的動機づけによって説明できるであろう。その際、排他性欲求と排他性規範は、それぞれ次のような関係が見られると予想される。まず、排他性欲求は、自分と同じ境遇や価値観を有している友人への接近的動機づけと関連しているだろうと考えられる（仮説１）。なぜならば、排他性欲求は、仲間集団やそのメンバーとの親密さを確認するために、仲間集団内だけの活動および、特定のメンバーと一緒にいること、つまり接近を求める傾向を意味するからである。一方、排他性規範は、自分の所属している仲間集団が、集団内の友人との同一行動を求め、集団外の友人と関わりを避けることを意味しているので、回避的動機づけと関連しているだろうと考えられる（仮説２）。なぜならば、排他性規範は、自分が所属している仲間集団のメンバーがとるべき同一行動についての暗黙の規範であり、仲間集団に所属しているためには、その規範を逸脱しないような関わり、つまり拒絶を避けるように関わっていかなければならないからである。加えて、排他性の両指標と社会的動機づけの関係においては、所属している仲間集団の学級内における影響力の強さを媒介しているのではないかと考え、この点についても探索的に検討を行う。

次に、仲間集団内にいるメンバーの類似性である。集団内に自分と類似しているメンバーが多いほど、所属する仲間集団は本人との類似性の高い集団だとみなせる。排他性欲求の高い人にとっては、類似性の高い集団は仲間集団のかけがえのなさや魅力の高さと関連するだろう。本研究では、授業外に一緒にいる人を仲間集団と位置づけ、その集団のかけがえのなさや重要性、魅力を測定するが、

全体的にこれらの評価は高いと予想される。そのため、排他性欲求とメンバーの類似性は関連しているだろう（仮説３）。

加えて、仲間集団との行動であるが、排他性規範は、一緒に行動することに関する暗黙の規範であるから、その規範を強く認知しているほど、仲間集団内との行動が多いだろうと予測される（仮説４）。

これらの概念に加え、本研究では探索的に親友の存在についても検討する。本人が親友と考える人が仲間集団にいる場合と、そうでない場合で、仲間集団の排他性がどのように異なるかを検討する。

【方法】

調査対象者と調査時期

鹿児島県内の中学生および高校生計1092名であった。このうち、回答を望まなかった者や欠損値のなかった997名（男子603名、女子394名）を分析に用いた。内訳は、中学１年生173名（男子89名、女子84名）、中学２年生172名（男子90名、女子82名）、中学３年生163名（男子81名、女子82名）、高校１年生184名（男子126名、女子58名）、高校２年生190名（男子132名、女子58名）、高校３年生115名（男子83名、女子30名）であった。中学校は１校に依頼し、全校生徒数が600人程度であった。高等学校は県立２校に依頼し、１校は定員900人程度の地方の進学校（普通科）であった。調査は年末実施であったので、この学校では、受験への配慮から３年生には実施しなかった。もう１校は、定員450人程度の学校（工業科）であった。なお、調査時期は中学校が2011年７月、高等学校が同年12月～２月であった。

質問紙の構成

1．フェイスシート

友人関係に関する調査という表題の下、アンケートの説明を記し、学校名、学年および性別を尋ねた。

2．所属している仲間集団に関する質問

まず、「あなたのクラスの中で、休み時間や放課後によくいっしょにいる人を思い浮かべてください」とし、「以下の質問では、あなたとその人たちをグループとみなして」回答するよう求めた。そして、自分以外の人の姓をイニシャルで表記させた。同一イニシャルには数字を付記させた。その上で、仲間集団のかけがえのなさ、重要度、魅力度、影響力の強さを単項目で回答させた。いずれも５件法であった。

3．メンバーの類似性に関する質問

想起した人たちのうちで、以下に挙げる点で、回答者と類似している人の程度を尋ねた。「趣味や興味・関心」「家庭環境」「今後の進路」「人付き合いの仕方」「休日の過ごし方」の５項目から構成されていた。４件法（1：全くいない～４：たくさんいる）であった。なお、大問としては、２と同じカテゴリに含めた。

4．社会的動機づけ尺度

Elliotら（2006）が開発した社会的動機づけ尺度を長谷川・相馬（2011）が翻訳したものを使用した。８項目から構成され、それぞれ接近的動機づけ、回避的動機づけ４項目ずつであった。５件法（1：全くあてはまらない～５：非常によくあてはまる）を用いた。なお、大問としては、２と同じカテゴリに含めた。

5．排他性規範

排他性規範の定義を踏まえ、有倉（2006）、有倉・乾（2011）で使用した尺度をもとに改編した項目を、社会心理学の専門家２名に構成概念妥当性を吟味してもらい、修正を重ねて完成させた。全部で10項目からなる。５件法（1：全くあてはまらない～５：非常によくあてはまる）を用いた。想起した仲間集団に該当する程度を尋ねる形式であったので、大問としては、２と同じカテゴリに含めた。

6．仲間集団との行動

以下に挙げることを想起した仲間集団ととることが多いか、それとも仲間集団以外ととることが多いかを尋ねた。５件法（1：ほとんど自分のグループと行っている～５：ほとんど自分のグループ以外とおこなっている）であった。なお、大問としては、２と同じカテゴリに含めた。

7．排他性欲求

排他性欲求の定義を踏まえ、三島（2004、2008）を参考に、中高生用に作成した。４と同様に、社会心理学の専門家２名に構成概念との妥当性を吟味してもらい、修正を重ねて完成させた。全部で

10 項目から構成され、５件法（1：全くあてはまらない～５：非常によくあてはまる）を用いた。

8．親友に関する質問

まず、親友と呼べる人がいるかどうかを、はい・いいえで回答してもらい、いいえと回答した場合、回答終了とした。はいと回答した場合、その親友が想起した仲間集団にいるかどうかを、はい・いいえで回答してもらった上で、全部で８項目からなる質問に回答してもらった。内容は、悩みの開示、被開示の程度、対等性などから構成され、５件法（1：全くあてはまらない～５：非常によくあてはまる）を用いた。

手続き

調査を実施した学校へは、校長宛の依頼文書を渡して、概要や留意点を訪問して説明し、許可を得た後、質問紙を郵送した。調査実施の留意点を、調査を依頼したクラス担任へ渡し、一斉に実施してもらった。調査実施にあたっては、回答は強制されるものでないこと、回答したくない場合は、表紙に記入後、そのままにしておいてよいこと、回答の途中で気分が悪くなったら回答をやめてよいなどの配慮を表紙に記し、クラス担任にも調査実施の留意点を読んでから実施してもらうよう依頼した。

【結果】

排他性尺度の内的整合性の検討

本研究で開発した排他性欲求、排他性規範の両尺度の基礎統計量や内的整合性の検討を行った（Table 1）。

まず、排他性欲求であるが、項目６「休み時間には、自分のグループ以外の人とも遊びたい」は、本尺度においては逆転項目を想定していたが、項目－全体相関を求めたところ、ほぼ無相関であった。校種×性ごとに求めてみたところ、中学生では正の弱い相関が、高校生の男子で中程度の負の相関が見られていたので、以降の分析においては、本尺度から除外して使用した。従って全９項目の内的整合性は α =.85 となった。各項目の分布を見ると、登下校や教室移動などに関する項目は比較的代表値（平均値、中央値、最頻値）が高かったものの、排他的な意味合いの強い項目の代表値は低かった。

次に、排他性規範であるが、全 10 項目の内的整合性は α =.90 となった。各項目の分布を見ると、「全くあてはまらない」を選択する割合が高く、代表値は低く、歪度はいずれの項目も高い正の値であった。平均値から標準偏差を引いた値が尺度最低値の１を下回ったことから、床効果（floor effect）が見られると判断した。こうした問題はあるものの、両尺度とも内的整合性は十分であると判断した。

これらの尺度について、校種×性の２要因分散分析を行ったところ、排他性欲求では、校種の主効果のみが有意であり（$F(1,993)=16.80$, $p<.001$）、中学生（$M=2.60$）の方が高校生（$M=2.38$）より排他性欲求が強かった。排他性規範では、性の主効果のみが有意であり（$F(1,993)=6.24$, $p<.05$）、予想に反して男子（$M=1.58$）の方が女子（$M=1.47$）よりも排他性規範が強かった。

関連する尺度、指標の基礎統計量

Table 1 には、性別×校種ごとの仲間集団に関する指標（友人の人数、かけがえのなさなど）、排他性両尺度、社会的動機づけ尺度の平均と標準偏差を挙げた。その結果、自分を除いた仲間集団の人数は、男子で 5.83 人、女子で 4.29 人であり、有倉（2011）と比べると少ないが、有倉（2011）では人数を書かせただけなのに対して、本研究では想起させイニシャルを書かせたという違いを反映していると言えよう。分散分析の結果は、校種（$F(1,993)=5.81$, $p<.05$）、性（$F(1,993)=64.31$, $p<.001$）の主効果、および交互作用（$F(1,993)=4.96$, $p<.05$）が有意であった。いずれの校種も男子の方が女子よりも仲間集団の人数が多かった。

生徒にとって、仲間集団がどれくらいかけがえのないものであり、重要で魅力的なのかを確認するために、各指標の平均値を示した。いずれの指標も５に近く、生徒にとって価値ある集団であることがわかる。

クラスにおいて仲間集団がもつ影響力については、男子の方が女子より、所属している仲間集団が影響力をもっていると評価していた（$F(1,993)=17.94$, $p<.001$）。

Table 1　性別×校種別の平均（標準偏差）

	男子（603）		女子（394）	
	中学生（260）	高校生（343）	中学生（248）	高校生（146）
仲間集団の人数	5.82(2.86)	5.85(3.05)	3.99(1.89)	4.82(2.61)
かけがえのなさ	4.61(0.68)	4.48(0.34)	4.69(0.67)	4.66(0.64)
重要度	4.72(0.57)	4.60(0.64)	4.77(0.55)	4.76(0.54)
集団の魅力	4.22(0.84)	4.14(0.85)	4.28(0.88)	4.38(0.81)
集団の影響力	3.38(1.15)	3.35(1.08)	3.03(0.95)	3.11(0.91)
排他性欲求	2.54(0.78)	2.37(0.83)	2.66(0.73)	2.41(0.70)
排他性規範	1.56(0.58)	1.59(0.81)	1.48(0.49)	1.46(0.58)
接近的動機づけ	4.06(0.74)	3.79(0.77)	4.19(0.68)	3.90(0.72)
回避的動機づけ	3.56(0.84)	3.43(0.83)	3.52(0.84)	3.48(0.81)
メンバーの類似性	2.84(0.54)	2.71(0.56)	2.88(0.55)	2.70(0.53)

Note. 上２行の（　）は *N*, 各変数の（　）内は標準偏差である。

社会的動機づけ尺度は、接近的動機づけが α =.83、回避的動機づけが α =.78 といずれも十分であったので、各４項目を加算し項目数で除して以下の分析に使用した。

メンバーの類似性に関する質問は、内的整合性を検討したところ、項目２「家庭環境が似ている人」の項目－全体相関が低かったので除外し、残り４項目で算出した結果、α =.62 と高くはなかったが、項目間の相関はいずれも有意であったので加算し項目数で除して以下の分析に使用した。

なお、有倉（2012）で r=.42 と中程度の相関が得られた排他性欲求と排他性規範の相関を検討したところ、有意ではあったがÅAr=.25 ～ .30 と比較的独立した尺度としてみなせよう。

排他性と社会的動機づけの関係

まず、排他性欲求と排他性規範がそれぞれ、接近的動機づけおよび回避的動機づけとどのように関連しているかを検討するため、社会的動機づけを説明変数、排他性欲求と排他性規範をそれぞれ基準変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を、校種×性ごとに行った（Table 2,3）。

その結果、排他性欲求では、中学生男子は、接近的動機づけおよび回避的動機づけで正の標準化偏回帰係数が有意であり、いずれの動機づけも排他性欲求を強める方向に作用していた。高校生男子は、回避的動機づけで正の標準化偏回帰係数が有意であり、回避的動機づけが排他性欲求を強める方向で作用していた。

中学生女子は、接近的動機づけで正の標準化偏回帰係数が有意であり、接近的動機づけが排他性欲求を強める方向に作用していた。高校生女子は、接近的動機づけで正の標準化偏回帰係数が有意であり、接近的動機づけが排他性欲求を強める方向で作用していた。

排他性欲求は、自分と同じ境遇や価値観を有している友人への関心の高さを反映していることから、接近的動機づけと関連しているだろうと考えられると予想した。その結果、中学生男子においては回避的動機づけとも関連していたが、総じて仮説１を支持していたと言ってよいであろう。

一方、排他性規範では、高校生男子は、接近的動機づけで負の標準化偏回帰係数が、回避的動機づけで正の標準化偏回帰係数が有意であり、接近的動機づけが低いほど、また、回避的動機づけが高いほど、排他性規範が強くなることが示された。中学生男子は、標準化偏回帰係数はいずれも有意でなかった。

中学生女子は、回避的動機づけで正の標準化偏回帰係数が有意であり、回避的動機づけが排他性欲求を強める方向に作用していた。高校生女子は、接近的動機づけで負の標準化偏回帰係数が、回避的動機づけで正の標準化偏回帰係数がそれぞれ有意であり、接近的動機づけが低いほど、回避的動

Table 2　排他性欲求を基準変数とした重回帰分析の結果

説明変数	中学生 男子	中学生 女子	高校生 男子	高校生 女子
接近的動機づけ	.26***	.33***	.25***	.24***
回避的動機づけ	.14*			
R^2	.12***	.11***	.06***	.06***
$adj\text{-}R^2$	.12***	.11***	.06***	.05**

Note.　*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

Table 3　排他性規範を基準変数とした重回帰分析の結果

説明変数	中学生 男子	中学生 女子	高校生 男子	高校生 女子
接近的動機づけ			-.14*	-.22*
回避的動機づけ		.21***	.21**	.29**
R^2		.04***	.03**	.06*
$adj\text{-}R^2$		.04***	.02**	.05*

Note.　*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

機づけが高いほど、排他性規範が強くなることが示された。

排他性規範は、所属している仲間集団の行動規範を逸脱しないよう関わらなければならないと考える傾向を測定していることから、回避的動機づけと関わっているだろうと予想したところ、中学生男子以外は、正の偏回帰係数が得られ、仮説２を支持していた。また、高校生においては、男女とも接近的動機づけで負の偏回帰係数も得られ、仲間集団と関わりたいという動機づけの低さとも関わっていたことが示された。

次に、影響力の強さを３群（強群・中群・弱群）に分け、性別×影響力ごとに上記の関係について検討を行った。校種を含めなかったのは、高校生女子においてサンプル数が少なくなること、また、上記の結果を踏まえると、校種より性の影響が見られていると判断したためである。

所属集団の影響力は、とても強い、やや強いとした生徒を強群（男子 107 名、女子 89 名）、どちらとも言えないとした生徒を中群（男子 250 名、女子 199 名）、あまり強くない、全く強くないとした生徒を弱群（男子 246 名、女子 106 名）とした（Table 4,5）。

まず、排他性欲求であるが、男子は、強群、中群では接近的動機づけで正の標準化偏回帰係数が有意であり、接近的動機づけが高いほど、排他性欲求が強くなることが示された。また、弱群では、接近的動機づけ、回避的動機づけともに正の標準化偏回帰係数が有意であり、いずれの動機づけも排他性欲求を強める方向に作用していた。

女子は、強群で、接近的動機づけの正の標準化偏回帰係数が有意であり、接近的動機づけが高いほど、排他性欲求が強くなることが示された。また、中群で、接近的動機づけおよび回避的動機づけで正の標準化偏回帰係数が有意であり、いずれの動機づけも排他性欲求を強める方向に作用していた。弱群は有意な標準化偏回帰係数が得られなかった。

次に、排他性規範であるが、男子は、中群で、接近的動機づけの負の標準化偏回帰係数が有意であり、接近的動機づけが高いほど、排他性規範が弱くなることが示された。また、弱群で、回避的動機づけの正の標準化偏回帰係数が有意であり、回避的動機づけが高いほど、排他性規範が強くなることが示された。

女子は、強群で、回避的動機づけの正の標準化偏回帰係数が有意であり、回避的動機づけが高い

ほど、排他性規範が強くなることが示された。また、弱群で、接近的動機づけの負の標準化偏回帰係数と回避的動機づけの正の標準化偏回帰係数がそれぞれ有意であり、接近的動機づけが低いほど、回避的動機づけが高いほど、排他性規範が強くなることが示された。なお、中群では有意な標準化偏回帰係数が得られなかった。

上記の結果より、クラス内における仲間集団の影響力の強さは、少なからず、排他性の両指標と社会的動機づけの関係とを媒介していることが示された。

排他性欲求とメンバーの類似性の認知との関係

自分が所属する仲間集団内に自分と類似しているメンバーが多いほど、本人にとって、所属する仲間集団は本人との類似性の高い集団だとみなせる。類似性の高い集団は、本人の排他性欲求を満たすことになるので、仲間集団のかけがえのなさや魅力度が高いと、両者に関係が見られると予想した。

その結果、魅力度を高いと評価した生徒だけを抽出して（N=789；全体の 79%）、排他性欲求とメンバーの類似性との相関を求めたところ、男子においては、中学生、高校生ともに正の有意な相関が見られ（中学生 r=.26, p<.001；高校生 r=.27, p<.001）、仮説 3 を支持していた。一方女子においては、中学生では有意な正の相関が見られたが（r=.17, p<.05）、高校生は有意な相関が見られなかった。

排他性規範と仲間集団との行動との関係

排他性規範は、一緒に行動することに関する暗

Table 4　排他性欲求を基準変数とした重回帰分析の結果（集団の影響力）

説明変数	男子 弱群	男子 中群	男子 強群	女子 弱群	女子 中群	女子 強群
接近的動機づけ	.16*	.13*	.34***		.26***	.36***
回避的動機づけ	.25***				.17*	
R^2	.13***	.02*	.12***		.14***	.13***
$adj\text{-}R^2$	.12***	.01*	.11***		.13***	.12***

Note.　*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

Table 5　排他性規範を基準変数とした重回帰分析の結果（集団の影響力）

説明変数	男子 弱群	男子 中群	男子 強群	女子 弱群	女子 中群	女子 強群
接近的動機づけ		-.26***		-.31***		
回避的動機づけ	.21***			.27**		.28**
R^2	.04***	.07***		.13***		.08**
$adj\text{-}R^2$	.04***	.07***		.12***		.07**

Note.　*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

黙の規範であるから、その規範を強く認知しているほど、仲間集団メンバーとの行動が多いだろうと仮説について検討を行った。検討に際しては、行動に関する各項目で選択肢１、２を選んだ者は、当該行動を仲間集団内のメンバーと取っており、選択肢４、５を選んだ者は仲間集団外のメンバーと取っていると回答しているので、前者を集団内行動群（以下、Ｉ群）、後者を集団外行動群（以下、Ｏ群）として、どちらとも言えないと回答した群（以下、Ｍ群）を加えて、排他性規範について、校種×性別ごとに一要因分散分析を行った。

「おしゃべり」については、中学生男子では、群間の効果が有意であり（F(2,257)=5.47, p<.01）、多重比較の結果、Ｉ群（M=1.67; N=145）がＭ群

（M=1.41; N=68）より排他性規範が強かった。中学生女子では、群間の効果が有意であり（F（2,245）=3.82, p<.05）、多重比較の結果、O群（M=1.58; N=34）がM群（M=1.32; N=50）より排他性規範が強かった。高校生男子では、群間の効果が有意であり（F(2,257)=10.41, p<.001）、多重比較の結果、Ⅰ群（M=1.40; N=159）がM群（M=1.67; N=117）O群（M=1.90; N=67）より排他性規範が弱かった。高校生女子では効果は有意でなかった。

「メールのやりとり」については、中学生男子では、群間の効果が有意であり（F(2,257)=6.75, p<.001）、多重比較の結果、Ⅰ群（M=1.73; N=82）がM群（M=1.44; N=125）より排他性規範が強かった。高校生男子では、群間の効果が有意であり（F(2,340)=6.56, p<.01）、多重比較の結果、Ⅰ群（M=1.49; N=98）とM群（M=1.53; N=177）がO群（M=1.90; N=68）より排他性規範が弱かった。中学生女子および高校生女子では効果は有意でなかった。

「ノートの貸し借り」については、中学生男子では、群間の効果が有意であり（F(2,257)=7.98, p<.001）、多重比較の結果、Ⅰ群（M=1.81; N=55）がM群（M=1.46; N=145）より排他性規範が強かった。高校生女子では、群間の効果が有意であり（F(2,143)=4.08, p<.05）、多重比較の結果、M群（M=1.39; N=81）とⅠ群（M=1.46; N=51）がO群（M=1.86; N=14）より排他性規範が弱かった。中学生女子および高校生男子では効果は有意でなかった。

「休日を一緒に過ごす」については、中学生男子では、群間の効果が有意であり（F(2,257)=3.26, p<.05）、多重比較の結果、Ⅰ群（M=1.66; N=100）がM群（M=1.45; N=94）より排他性規範が強かった。高校生男子では、群間の効果が有意であり（F(2,340)=7.70, p<.001）、多重比較の結果、Ⅰ群（M=1.46; N=111）とM群（M=1.54; N=162）がO群（M=1.91; N=70）より排他性規範が弱かった。高校生女子では、群間の効果が有意であり（F(2,143)=3.54, p<.05）、多重比較の結果、M群（M=1.36; N=70）がO群（M=1.77; N=15）より排他性規範が弱かった。中学生女子では効果は有意でなかった。

このほか、「同じ持ち物をもつ」「帰る方向が同じ人と帰宅する」では、いずれも有意な効果が得られなかった。

結果からは、中学生男子は、６項目中４項目でⅠ群の排他性規範が強く、仮説４を支持していたが、高校生男子では、６項目中３項目で仮説４とは逆にⅠ群の排他性規範が弱かった。女子については仮説４を支持しているとは言えなかった。

親友に関する分析

本研究では、探索的に親友に関する分析を行った。まず、校種×性別に見た親友の有無の回答であるが、いると回答した割合が中学生男子では、87.3%（227名）、中学生女子では94.8%（235名）、高校生男子では、76.6%（262名）、高校生女子では、88.7%（125名）であった。

親友がいると回答した生徒に対して、仲間集団内にいるかいないかを尋ねたところ、中学生男子では、66.7%（152名）、中学生女子では64.4%（152名）、高校生男子では、74.3%（194名）、高校生女子では、56.1%（69名）であった（x^2(3)=13.65, p<.01）。

親友が仲間集団内にいるか（以下、IN群）、仲間集団外にいるか（以下、OUT群）で、悩みの開示や対等性など、親友との関わりのあり方に違いが見られるかを検討したところ、中学生女子を除いて、有意差が見られなかった。中学生女子では、親友からの悩みの開示（項目２）で、IN群（M=3.42）がOUT群（M=3.77）より、開示されていないと思っていた（t(233)=2.54, p<.05）。また、対等に関わっている（項目３）で、IN群（M=4.26）がOUT群（M=4.57）より、対等に関わっていないと評価していた（t(233)=2.89, p<.01）。親友が良くないことをしたら注意する（項目４）で、IN群（M=3.91）がOUT群（M=4.18）より、注意しないと評価しており（t(233)=2.05, p<.05）、私が良くないことをしたら親友は注意する（項目５）で、IN群（M=3.93）がOUT群（M=4.18）より、注意しないと評価していた（t(233)=2.02, p<.05）。親友の本当の悩みを知っている（項目８）で、IN群（M=3.31）がOUT群（M=3.73）より、知っていないと評価していた（t(233)=3.00, p<.01）。なお、中学生女子以外では、高校生男子に１項目のみ有意差があったが、

これは、第一種の過誤とみなした。

【考察】

排他性尺度の妥当性・信頼性について

本研究では、定義を踏まえて、中高生用に排他性欲求尺度および排他性規範尺度を作成した。妥当性については、尺度作成後、本研究に関わっていない社会心理学の研究者２名から示唆を受けて検討を重ねたので、主観的な判断ではあるが、妥当性があると判断した。信頼性については、ともに α =.80 以上あることから、信頼性はあると見なしてよいと判断した。ただし、いずれも今後、更なる検討が必要であろう。

排他性欲求については、中学生の方が高校生より強かったという結果については、有倉（2011）と同様であったが、性差は見られなかった。有倉（2011）では、女子の方が男子より、排他性欲求が強いという結果が得られ、小学生を対象とした三島（2004）の知見とも異なっていた。このことは、開発した尺度が真に欲求だけを測定したためとも考えられる。三島（2004）の排他性尺度は、感情（いやな気分になる、楽しい、つまらない）や欲求（～したい、～ほしい）が中心であるものの、実際にとっている行動（～したことがある、～する）を測定する項目も含まれていた。本研究で作成した尺度はすべて「～したい」で統一したことが違いの理由の一つだと考えられよう。

排他性規範については、性差は見られたものの、男子の方が女子よりも高いというこれまでと逆の結果が得られた。この理由についても、尺度で使用した表現の違いが考えられる。有倉（2011）で使用した尺度は、行動規範であったが、「自分のグループは仲が良い」とか、「自分のグループはメンバーが決まっている」といった必ずしも規範とは言えない項目も含まれていた。有倉（2011）で使用した尺度は、ある意味では、回答者が所属する仲間集団の排他的な特徴をどのように認知しているかを尋ねていたのに対して、本研究で新たに作成した尺度では、「～雰囲気がある」で統一し、所属する仲間集団の空気をどのように認知しているかを尋ね、行動規範とした。しかし、有倉（2011）では、平均値が M=2.00 程度であったが、本研究で新たに作成した尺度では、平均値から標準偏差を引いた値が 1.00 以下であり、床効果が見られたと判断した。従って、以降に行った分析の解釈を控えめに判断する必要があろう。項目に対して、特に女子は、望ましくない行動規範ととらえた可能性がある。

排他性と社会的動機づけの関係

本研究では、排他性欲求および排他性規範の特徴を検討するために、対人行動や仲間集団での行動に影響を及ぼすと考えられる社会的動機づけとの関係を検討した。

まず、排他性欲求であるが、自分と同じ境遇や価値観を有している友人への接近的動機づけと関連しているだろうと考えた。排他性欲求の高さは、仲間集団内だけの活動および、特定のメンバーと一緒にいることを志向すると考えたからである。その結果、中学生男子では、回避的動機づけも寄与していたが、総じて、仮説を支持しているとはみなしてよいと思われる。仲間集団との関わりは、集団外との関わりにかかわらず、集団内のメンバーとのつながりや親密感を高めたいという動機に基づいていることが考えられる。その点で、男女とも、排他性欲求の強さは、集団内メンバーとの積極的な関わりを意味する概念と考えられよう。しかし、男子においては、対立や不一致を避ける動機でも、仲間集団のメンバーと関わっていると考えられ、排他性欲求という概念がもつ意味は、男女で異なっていることが示唆されよう。

一方、排他性規範は、所属している仲間集団における行動規範であり、本人が望まなくてもとらなければいけない雰囲気を測定していた。そのため、回避的動機づけとの関わりが考えられたが、結果としては、中学生男子以外は、仮説を支持していた。さらに高校生では、接近的動機づけの低さも関わっており、排他性規範の強さが、単に、対立や不一致を避ける動機だけでなく、積極的につながりたいという動機の欠如からも規定されることが示された。

本研究では、さらに、所属する仲間集団の影響力の強さがこれらの関係をどのように媒介するのかも検討を行った。その結果、排他性欲求につい

ては、男女とも仲間集団の影響力が強いと考えている生徒は、接近的動機づけによって規定されていたが、影響力が弱いと考えている生徒は、回避的動機づけも排他性欲求を高めている傾向が見られた。また、排他性規範については、一貫した結果が得られているとは言いがたいが、集団の影響力が弱い生徒において、仮説を支持する傾向があったとみなせよう。

学級内において、所属する仲間集団の影響力の強さは、そのまま、その集団の所属している生徒自身の地位にも影響していると考えられよう。最近、学級内の生徒たちには、自分では変えることのできない見えない地位というものがあるということを指摘している論説（鈴木，2012）もあり、その点では興味深い結果であると言えよう。

排他性と関連する指標との関係

本研究では、排他性に関連すると考えられるメンバーの類似性の認知、および仲間集団との行動との関係についての検討を行った。

メンバーの類似性については、いつも一緒にいる仲間集団のため、その集団の魅力度が高いことを仮定し、その上で、排他性欲求の強さは、メンバーの類似性の高さと関連しているだろうと仮説を立てて、検討を行った。その結果、男子と中学生女子においては、仮説どおり魅力度の高い生徒においてのみ、両者の関係が見られたが、高校生女子においては見られなかった。上述した社会的動機づけに関する知見を踏まえると、排他性欲求と関連する社会的動機づけは、男子と女子とで異なっており、男子はその強さが対立や不一致を避ける動機と関連しており、女子は積極的に関わりたいという動機と関連していた。仲間集団の形成・維持においては、少なからず同質性を背景に結びついている場合と、ある程度多様性を認めて結びついている場合とが考えられ、その際、前者は回避的な動機づけと関連し、後者は接近的な動機づけと関連すると思われる。本サンプルでの高校生女子の排他性欲求は、後者の場合に当たっているので、類似性との関係が見られなかったと推測できよう。

仲間集団との行動については、排他性規範との関連性を予想したが、結果としては中学生男子のみが、予測どおりであり、高校生男子では逆の結果が、女子においては関係が見られなかった。このような結果になった理由としては、今回測定した方法が結果に影響している可能性が考えられる。今回の測定は、頻度を尋ねているのではなく、仲間集団内のメンバーと行っているのか、それとも集団外のメンバーと行っているのかという傾向を尋ねる形式であった。そのため、頻度であれば、また異なった結果が得られたかもしれない。どちらと行っているかということであれば、男子においては、中学生より高校生の方が、行動範囲が広く、そうしたことが影響したのかもしれない。

本研究では、探索的に親友との関係も検討した。親友が所属する仲間集団にいるかどうかといった設問からは、女子の方が仲間集団外に親友がいると回答している割合が高かった。親友が仲間集団外にいるというのは、所属している仲間集団に特別な存在がいないことを意味しており、そうした生徒にとっては、親友が仲間集団にいる生徒と比べると、その仲間集団の存在意義が異なっていると思われる。そこで、親友が仲間集団にいるかいないかで、親友との関わりに違いが見られるのかを探索的に検討したところ、中学生女子においてのみ、違いが見られた。中学生女子において、仲間集団内に親友がいると答えた生徒は、集団外にいると答えた生徒より、相手から悩みの開示をされておらず、対等性が低く、互いに注意し合えず、本当の悩みを知らないと感じていた。つまり、仲間集団内の親友は、親友をこうした特徴から定義するならば、仲間集団外に親友がいる場合より、親友と見なせないのかもしれない。このことは、親友が集団内にいる場合、他のメンバーとの関係もあって、気の置けない関係になりにくいことを意味していると言えよう。

本研究の問題点と今後の課題

本研究では、定義を踏まえ、中高生版の排他性欲求尺度と排他性規範尺度を作成し、妥当性・信頼性の検討、関連する指標から、中高生の仲間集団の排他性の特徴について検討を行ってきた。結果を見る限り、特に、排他性規範においては、有

倉（2011）とは異なる結果が得られた。このことは、一般に仲間集団の排他性が高いとされる中学生および高校生女子の傾向とは異なるものであった。排他性欲求の方では、三島（2004）と同じ結果が得られていたことを考えると、本研究で作成した排他性規範で測定された仲間集団の特徴は、本来女子の仲間集団に見られると考えられているものではなく、別の特徴を表しているかもしれない。しかし、上述したように、全体的に平均値が低く、床効果（floor effect）が見られたと判断されるため、今後は、排他性規範尺度の回答の抑圧を防ぐ方法を考えていく必要があろう。

【引用文献】

Elliot, A. J. （2006）. The hierarchical model of approach-avoidance motivation. *Motivation and Emotion*, **30**, 111-116.

Elliot, A. J., & Church, M. A. （1997）. A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 218-232.

Elliot, A. J., Gable, S. L., & Mapes, R. R. （2006）. Approach and avoidance motivation in the social domain. *Personality and Social Bulletin*, **32**, 378-391.

榎本淳子（1999）．青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究 , **47**, 180-190.

Gable, S. L. （2006）. Approach and avoidance social motives and goals. *Journal of Personality*, **71**, 175-222.

三島浩路（2004）．小学校高学年のインフォーマル集団の排他性に関する研究　生徒指導研究 , **15**, 51-56.

三島浩路（2008）．仲間集団指向性尺度の作成－小学校高学年用－　カウンセリング研究 , **41**, 129-135.

相馬敏彦・礒部智加衣（2011）. 異質なネットワークにくたびれる回避動機者、満たされる接近動機者　日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集 , P.99.

相馬敏彦・山下倫実（2011）．回避動機が満たされれば安心できる？－社会的相互作用における接近・回避的動機づけが関係で経験される感情に及ぼす影響－　日本心理学会第 75 回大会発表論文集 , P.127.

鈴木　翔（2012）. 教室内カースト　光文社新書

山下倫実・相馬敏彦（2011）．社会的相互作用における接近・回避的動機づけが共通ネットワークの変化に及ぼす影響　日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集 , P.167.

有倉巳幸（2011）．生徒の仲間集団の排他性に関する研究 , 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 , **21**, 161-172.

有倉巳幸（2012）．中学生の仲間集団の排他性に関する研究　鹿児島大学教育学部研究紀要（教育科学編）, **63**, 29-41.

有倉巳幸・乾　丈太（2007）．児童・生徒の友人関係の排他性に関する研究 , 鹿児島大学教育学部研究紀要（教育科学編）, **58**, 101-107.

本論文は、平成 22 年度～平成 24 年度科学研究費　基盤研究（c）　課題番号 22530673 の助成を受けた研究の一部である。